まえがき

岡本三成氏が公明党の新代表に就任した。私は、この新しい出発に強い期待を寄せている。それは、創価学会が大切にしてきた生命の尊厳、人間の幸福、平和への責任という価値観を、現実の政治の中で実現する挑戦が、新たな段階に入ると考えるからである。日本と世界が深刻な危機に直面している今、公明党の使命は、これまで以上に重くなっている。

政治の危機は、議席の増減や政権の組み合わせだけでは測れない。働いても暮らしが楽にならない。病気や介護への不安から将来を描けない。学びたい若者が、教育費や奨学金の返済を考えて将来の夢にブレーキをかけている。こうした一人一人の苦しみに政治の言葉が届かなくなったとき、民主主義の土台が内側から崩れていく。政治家の演説がどれほど勇ましくても、今日を生きる人間の不安に応えられなければ、政治への信頼は回復しない。

世界に目を向けても、人間の生命より国家の威信やイデオロギーが優先される危険がある。相手の置かれている状況を理解しようとせず、自分たちの正しさだけを掲(かか)げれば、対立は際限なく深まる。国内では排除の言葉が支持を集め、国際社会では対話を試みることさえ弱さと受け取られる。このような時代だからこそ、異なる立場の人間が共に生きる条件を探る政治が必要なのである。

その責務を担うのが、中道主義、人間主義の政治である。ただし、中道という言葉を、右と左の中間に位置することだと誤解してはならない。人間の尊厳を傷つける主張に対してまで、半分だけ譲歩することが中道であるはずもない。生命を尊重し、平和を追求する確固たる価値観を持つ人々が中道を実践することができるのである。中道を軸に据える政党には、状況に流されない原則と、現実を変えるための柔軟さが同時に求められる。

本書の対談で、岡本氏はこの点を明快に語っている。私が特に読者に受け止めていただきたいのは、次の発言である。

〈中道とは、異なる政治的立場の中間で妥協することではありません。社会の中に存在する、さまざまな利害や価値観を認めながら、人間の尊厳を守るという基本原則に立って合意を形成していく政治姿勢です。

現代の日本社会では、所得格差、世代間格差、そして都市と地方の格差が広がっています。さらに、外交・安全保障政策をめぐっても、対立する意見が先鋭化しています。このような状況で、政治家が自分と異なる立場の人々を敵とみなし、支持者を動員することは比較的容易です。しかし、それによって社会全体の問題が解決するわけではありません。

中道政治の難しさは、異なる立場の人々の間に共通の利益を見いださなければならない点にあります。そのためには、相手の主張を聞き、必要な場合には自分の立場を修正する能力が求められます。対話とは、単に相手と会話することではありません。自分とは異なる考え方にも、合理性が存在する可能性を認めることです〉（本書28〜30頁）

この言葉には、岡本氏の政治姿勢が凝縮されている。相手を打ち負かすことより、人間が共に生きられる答えを見いだす。そのために、自分自身の判断も問い直す。これは容易な態度ではない。自分を支持してくれる人々に、耳に心地よい言葉だけを届けるほうが、政治家にとっては楽である。それでも対話を選び、合意の形成に責任を負う。その覚悟を、私は岡本氏の発言から強く感じた。この覚悟に敬意を表する。

この中道主義の根底には、創価学会の価値観がある。一人一人の生命には、地位や財産や能力によって順位をつけることのできない尊厳がある。困難の中にいる人間を、社会の負担として見做(みな)してはならない。その人には、その人にしか果たせない役割があり、開くことのできる可能性がある。この確信を社会制度の中で具体化することが、人間主義の政治なのである。

私はプロテスタントのキリスト教徒であり、創価学会員ではない。しかし、よって立つ宗教が異なるからこそ、創価学会の価値観が持つ普遍的な意味を考えてきた。人の不幸の上に自分の幸福を築かないという倫理は、信仰を共有する人々の間だけに通用するものではない。異なる宗教の人にも、宗教を持たない人にも共通するものだ。公

明党には、その倫理を、誰もが内容を検討できる政策へと育てていく責任がある。

支持母体の価値観を大切にすることによって国民全体に奉仕することが加速される。自らの価値観の根底を確かめることで、目先の利害に流されず、広く社会に貢献することができる。問われるのは、その政策が誰の尊厳を守り、どのような不利益を改めるかである。公明党は、人間主義という原点から出発して、信仰も思想も異なる人々と協働する道を、さらに広げていかなくてはならない。

岡本氏への期待を強くするもう一つの理由は、自分たちの責任から逃げない姿勢である。本書には、長く与党にいた公明党にも、日本経済の「失われた30年」の責任の一端があるのではないか、と友人から問われた経験が語られている。岡本氏は、その問いを不当な非難として退けなかった。実績を並べて相手を説得する前に、自分たちが実現できなかったことを見つめ直したのである。

政治への信頼は、無謬（むびゅう）を装うことで生まれるものではない。できたことと、できなかったことを区別し、その理由を説明する。苦しい批判にも耳を傾け、次の行動を変える。そうした積み重ねによって初めて回復する。党を率いる人間が自らの痛みを伴

う反省を語れることには、大きな意味がある。岡本氏の率直さは、公明党の再出発を支える重要な力になると私は考えている。

自公連立からの離脱、中道改革連合の結成、そしてその挑戦が直面した困難も、この視点から捉える必要がある。政治の試みには、成果もあれば誤算もある。経緯を検証し、教訓を明らかにする仕事は欠かせない。しかし、一つの政治的な枠組みの成否によって、中道主義そのものの価値が決まるわけではない。人間の幸福という目的に照らし、組織や連携のあり方を選び直す力こそが求められる。

私は、岡本氏の経済や財政に関する専門性にも期待している。金融や企業経営の知識を、人間が安心して生きられる社会の建設に使おうとしているからだ。経済成長の数字と生活者の実感の間に隔たりがあるなら、その隔たりを埋めることが政治の仕事だ。国全体の豊かさを、一人一人が将来への希望として受け取れる仕組みが必要なのである。

本書で論じられるベーシックサービスは、その具体的な挑戦である。医療、介護、教育など、生きるために欠かせないサービスに、誰もが安心してアクセスできるように

する。所得が増えても、近くに医療機関がなければ受診できない。介護の担い手がいなければ、家族が仕事を辞めざるをえなくなる。支出への不安を減らし、必要なサービスを実際に利用できる条件を整えることが、人間の自由を現実的に広げる。

もちろん、理念を掲げるだけではサービスは届かない。財源をどう確保するか。現場を支える人材をどう育て、その処遇をどう改善するか。地域によって異なる事情に、どう対応するか。岡本氏には、専門的な知識と現場の声を結びつけ、実現までの道筋を示すことを期待したい。壮大な構想を語る力と、目の前で困っている人のために制度の細部を変える力。その両方が、公明党の政策を前へ進めるのである。

平和についても同じことが言える。平和を願う心を持ち続けながら、現実に存在する脅威もしくは潜在的脅威にどう対処するかを考え抜く必要がある。安全保障の議論において、守るべき対象である人間の生命と生活を見失ってはならない。対話の回路を維持し、誤解や不信の蓄積を防ぎ、衝突を回避する努力を重ねる。戦争を起こさせないための外交にこそ、知恵と忍耐を注ぐべきである。

核兵器のない世界を目指す姿勢も、人間主義から導かれる責任である。国家の戦略

を語るときにも、その下で暮らす一人一人の存在を忘れない。国境の向こうにも、子供の将来を案じ、家族の無事を願う人間がいる。その当たり前の事実を政治判断の中に取り戻すことが、平和への出発点になる。世界の分断が深まるほど、公明党には、人間を中心に据えた外交の必要性を訴え続けてほしい。

そして、公明党には、その理念を日々の行動で確かめる基盤がある。全国の地方議員と国会議員、党員・支持者がつないできたネットワークである。相談を待つだけでなく、声を上げる余裕さえない人のもとへ足を運ぶ。語られた悩みを個人の事情で終わらせず、制度の課題として受け止める。この営みの中に、中道政治を抽象論に終わらせない力がある。

岡本氏が語る「太陽の党」という言葉も、その実践と結びついている。代表一人が光を放つだけでは、社会の隅々まで温めることはできない。一人一人が自分のいる場所で、目の前の人を大切にする。その行動がつながることで、孤立していた人が社会との結びつきを取り戻す。公明党の再生は、その人に政治への希望が戻ることによって、最も確かに示されるはずである。

本書は、岡本三成という新しい公明党代表の決意を知るための対談である。同時に、政治は何のために存在するのかを、読者とともに考えるための書でもある。私は岡本氏に大きな期待を寄せる。創価学会の生命尊重の思想を力として、中道主義、人間主義を具体的な政策と外交に結実させてほしい。日本と世界が直面する危機の中で、人間の幸福から政治を立て直す。その挑戦を、私は強い確信を持って応援する。

2026年10月28日

佐藤優